

## 聖木曜日（主の晩さん）の説教

金 大烈 神父 2010年4月1日（木）

### 《神様への“裏切り”》

今日の福音(ヨハネ 13・1 15)のメッセージは、一言で言える内容だと思います。

ですから今日は、イエス様が12人の弟子たちに残されたみ言葉やみ心を黙想する前にある逸話を紹介させていただきます。

時代ははっきり覚えていませんが、スペインにある王様がいました。「民はどのような生き方をしているのか。苦しんでいるのか、楽にしているのか。」といつも気にかけている素晴らしい王様でした。ある日、王様は町の商店街を通りかかりました。その時、宝石店に飾られた美しい宝石が目にとまりました。そこで、家来たちを連れてその宝石店に入り、店の主人に「この宝石を私に売ってほしい。」と言いました。店の主人は恐縮しながら「王様、光栄です。」と答え、その宝石を王様に売りました。宝石を買った王様が店を出て、何十メートルも進まないうちに後ろから急いで走り寄って来る人がいました。振り返るとそれは宝石店の主人でした。彼は王様の前に来てひざまずくと「王様、申し訳ないお話ですが、王様がいらっしゃってからお帰りになるまでの間に、私の店で一番高いダイヤモンドがなくなりました。」と言いました。それを聞いた王様は、家来たちに「一緒にさっきの店に戻ろう。」と言い、再び宝石店に入りました。そして店の主人に「大きい壺に半分くらい塩を入れて持って来なさい。」と命令しました。店の主人は、さっそく壺を持ってきますが、その中には半分くらいまで塩が入っています。そして王様は家来たちに「手を握ったまま壺の中に入れ、塩をかき混ぜなさい。そのあと、手を出しなさい。」と命令します。家来たちは1人ずつ壺の塩に手を入れてかき混ぜました。最後の家来が手を出した後、王様は主人に「壺の中の塩を全部出しなさい。」と命令しました。主人がそのとおりにすると、壺の中から、大きなダイヤモンドが一つ現れました。

王様は、自分の家来の中の誰かがダイヤモンドを盗んだと思ったのでしょうか。しかし王様は、自分の愛する家来たちに恥をかかせたくなかったのでしょうか。もちろん王様自身も“誰がそのようなことをしたのか”知りたい気持ちはあったでしょう。しかし王様は、追求するのではなく盗んだ人が黙ってダイヤモンドを戻せるように配慮をしたのです。

これは物語ですが、なぜこの話を皆様に話したのか説明します。今日の福音のテーマは『愛』ですが、「見下ろす『愛』」ではなくて「見上げる『愛』」です。見下ろす立場で、施しをするような『愛』ではありません。イエス様がおっしゃっているのは、立場に関係なく、いつも相手を見上げる『愛』です。この物語の王様のやり方、考え方、心持ちは、神様の『愛』と似ているのではないかと思ったので、今日この話を紹介しました。

私自信も自分の人生を振り返ってみると、人から恥を感じたことはあまりありませんが、何かによって悟らせてくださる神様のみ心に恥を感じたことは数えられないくらいたくさんあります。責めら

れる心では、真の悔い改めはできません。配慮されている雰囲気、“その人が本当に自分のために心配している”という感覚や体験ができるときに「自分が本当に悪かった」という、反省や悔い改めができるのでしょうか。たぶんこの物語の王様は、このような知恵を発揮して、盗んだ誰かの心を反省させたのでしょうか。そのようなやり方、考え方が、私たちの主イエス様のみ心と全く同じなのではないかと思いました。

今日の福音で、イエス様は断言されましたね。ペトロが、「あなたは私の足を洗ってくださるのでしょうか。私の足などは決して洗わないでください。」と言います。その時イエス様は、「もし私があなたの足を洗わなければ、あなたは私と何の関わりもないことになる。」とおっしゃいます。これが今日の福音の核心となる部分です。私たちは「愛さなければならない」という言葉をよく知っています。自分の考えた『愛』を行い、得意になっていることもよくあります。しかし、今日の福音には、「本当に愛そうとするならば、足を洗いなさい。見下ろしながら洗うのではなく、見上げながら洗いなさい。その人を尊重しながら、その人のために、心をこめて洗いなさい。」というイエス様の教えがはっきり表れています。

私たちがこの世の中で体験するいろいろな苦しみ、喜び、感情のほとんどは、関わりの中で生じます。たぶん、天使のようなシスターたちが集まって生活している修道院の中でも、関わりのために悩んでいる方が結構いらっしゃると思います。バチカンの教皇様の周りの人たちにも、こういうことは必ず生じるでしょう。結局、私たちの生きる意味や生きる力というものは、関わりの中で作られます。もし関わりがなければ、私たちが正しく生きることに意味がなくなります。それが正しいのか正しくないのかも分からなくなります。しかし私たちはともに生きます。その関わりをどのように大切にすべきか、イエス様ははっきりおっしゃっているのです。関わりを避けるのは、愛ではありません。上手に関わるのも本物の愛ではありません。私たちが「イエス様、私はあなたの僕です。」という告白ができるようになるためには、先に相手のことを配慮し、一番低いところでその人の足を洗おうとする心で関わる必要があります。「そうでなければ、『愛』という言葉を使わないでほしい。」とイエス様はおっしゃっているのです。

イエス様は、恰好よく見せるためにこのようなことをしたわけではありません。皆様は、夫婦の間でもいろいろな言葉を使って愛を示そうとしていますね。その愛の中には、ご自分のことが何パーセントくらい入っているのでしょうか。本当の愛は、“相手のため”が100パーセントです。“自分のため”は0パーセントです。しかしそれは無理でしょう。可能ではありません。けれどもイエス様は、“相手が100パーセント”の愛を見せてくださったのです。だから、弱いところばかりの私たちでも、イエス様を「神様」と告白できるのです。いろいろな弱さを感じていても、完璧な愛を見せてくださった神様に頼ることができるのです。皆様、「私があなたの足を洗わなければ、あなたと私は何の関係もないことになる」という言葉をもう一回心に刻みましょう。そうすれば、私達が毎日出会う人々に、できるだけ心をこめて、“その中にイエス様の働きが働いているかもしれない”という心で、接す

ることができるのではないかと思います。

これから私は十二人の方の足を洗います。これは形式的な、儀式的な行いではありません。私も毎年、この夜は、「司祭とはこのようなものだ。」「できるだけ低くなって、全ての人を高めなければならない。」ということをもう一回意識します。足を洗われる方は、「恥ずかしい」とおっしゃるのですが、これは儀式ではなくて本当の典礼です。

さあ、皆様、このような心で、互いに愛し合いましょう。そしてその中には足りないことがたくさん出ると思います。しかしがっかりしないで、もう一回挑戦する心で、よくなるときまで、最後まで頑張りましょう。

ありがとうございました。